

05

農業法人ちぎりファーム
基山町園部



“うちんもん”と“よそんもん”
それぞれの想いを地域になじませる

キッカケ

鳥栖筑紫野道路の園部ICから、車で3分ほどに位置する基山町園部。この地域で祖父母が柿農家を営み、こどもの頃の思い出は竹林や柿畑での自然遊びだったという生島さん。しかし、結婚・出産を機に地元を離れ、久しぶりに思い出の地に足を運んでみると、高齢のため管理ができず人が入れないほど荒れ果てていました。不耕作地は年々増加し、「このままではふるさとが無くなってしまふ！」という危機感と、「どうにかしなければ！」という使命感に突き動かされ、地域づくり活動をスタート。令和4年には、新規就農者となって米づくりを始めました。



組織概要

「園部に人を呼び込みたい」と考えた生島さんは、地域活性化団体Tigiriを発足し、令和元年にマルシェイベントを開催。JR九州ウォーキングにあわせた企画で、地域の方たちと協力しながら令和4年までに計6回実施。この活動をきっかけに、同じ志を持つ方たちとの出会いが広がり、地域を持続的に守るため農業者になることを決意。令和4年、新規就農と同時に「株式会社ちぎりファーム」の取締役園主に就任しました。後継者がいない農地を中心に、農薬や化学肥料に頼らない自然の循環から生まれる、“おいしい”を大切にしたい農業を続けています。



中山間地域での挑戦



● 農産物の生産から営業、販売まで
かつて天領米として高い品質を誇っていた園部の米づくり。農業に頼らない方法で栽培した米は「ちぎり米」としてブランド化し、畑では柿や梅などの果樹をはじめ、少量多品目で野菜を栽培。社員への褒賞として「ちぎり米」を採用してもらえるよう、企業相手の営業にも精力的。

元牛舎を交流拠点に地域のにぎわいづくり

畜産で使われていた牛舎をリノベーションし、イベントやこどもたちの居場所づくりとして活用できる交流拠点に。環境と食、地域振興などをテーマにした、KBC（九州朝日放送）の「アサデス。ふぁーむ」の番組企画にも協力。

生島 陽子さん



つながり

ちぎりファームの代表を務めるのは、地域再生プロジェクトを手掛ける不動産会社の経営者。第三者の視点で、ビジネスとしての考えを地域に落とし込むことが必要だと考え、「彼のノウハウがあったからこそ、ファームを立ち上げられた」と生島さん。その一方で、「地域には米づくりの先輩がたくさんいて、いつも教えてもらっています」。地域の協力と理解があってこそ、令和7年には5.9haの田んぼを10haにまで拡大予定。それぞれに熱い想いを持つ、“うちんもん”と“よそんもん”をつなげて調整することも生島さんの大切な役割です。

耕す未来

持続可能な地域づくりに貢献する次のステップとして、農業を中核にレストランやカフェ、キャンプ場などさまざまな事業展開が考えられるなか、「夢物語かもしれませんが、園部ICから山へ向かうエリアを、自然と共存できるオーガニックエリアにしたい」と生島さん。例えば、里山保全のために伐採した竹をチップにして田んぼの肥料として循環させたり、こどもたちが川で遊べるエリアを作ったり、「地域内のいろんな人や団体と連携して、日常では味わえないような体験ができたら面白いはず」と夢は膨らみます。